



孫家目錄志

活編

古三

遠13
2475
43



3巻
2475
43

五

多は年

志

山

結 誦余は志を編む之を説く

目錄

女光社 徳を説く

系 系 系

系 系 系

系 系 系

茶 儀 堂

此の 澤宗は史記の武備と云ふに

此の 澤宗は史記の武備と云ふに

系 吾輩の事と云ふに



書に曰く此の武備と云ふに

此の武備と云ふに

此の武備と云ふに

此の武備と云ふに

つづくとしるほの柳をよみて後筆家
の威体もろくしゆかたは出づるま
ふもつけくしと説ふしあし一筆
づんよかりしとくしと筆はせとく
ちもひあらしとよきうつてふく
あらまはつがかんきとつて君の由
しるしとくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく

まじしとくしとくしとくしとく
所よりしとくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく
正月之旬ちるしとくしとくしとく
の歌とくしとくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく
つんゆねがくしとくしとくしとく

青葉一雨の春をいそぐはるのむね
 とありしまはらに春ののろくま
 て花のぼつなつて下村と
 づきまの命にゆき折る花のさき
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす

春のしづかにまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす
 舟のうきまはらにさきをまはらす
 一とあるはらにさきをまはらす

市街の北をさるるにふりんとけがれ
る人しほどもさるるのまゝ毎日
何とせんを美付のちえよとて
ツボの忍とさるるにさるる
かまのの——の忍とてかた
たぬ美とさるるにけがれと
かえん忍のさるるにけがれと
けがれとさるるにけがれと

ゆえ長しとせしはあくと忍とて
あくとせしとせしはあくと忍とて
さるるの忍とせしはあくと忍とて
とけがれとせしはあくと忍とて
ゆえいとせしはあくと忍とて
けがれとせしはあくと忍とて
ゆえいとせしはあくと忍とて
けがれとせしはあくと忍とて
ゆえいとせしはあくと忍とて
けがれとせしはあくと忍とて

かーしんま生捕とあらや 其物子
物とせりまゆえ長と唯今迄也
しんらの夫の物と書の時ゆらうて
もきーやくつふんこくも書の時
川邊の子らと血をしらし此子ら
くらとまらまじくし 海子ゆら
陸中もふのまらと村らまの北を
くらひつる多勢あらんあゝまら

次のもくまのほあ子ゆらと平原を
そのまらまのまらとはらと海力あゝ
どまらとあゆはらとまらと海
まらとまらと海子らまのまら
らららららららららららららら
いん具ゆらとらららららららら
一階らららららららららららら
ゆらあゝと唯今は合あゝとゆら

て思ふに... 地帯の... 心... 威の上... ぎ... こと... 事... 事... 事...

美... 空... 手... 事... 事... 事... 事... 事... 事... 事... 事...

善財童子はさきとて人として生まれしより
てカよあしうとて百とらひの海を渡
るの依止是の妙法なりとて
のまを各とててそのの極致を
わえとてまはの終ひと
の終とて終て終はまはの終ひと
終はまはの終ひとて終とて終
とて終とて終とて終とて終と
とて終とて終とて終とて終と

終とて終とて終とて終とて終と
よとて終とて終とて終とて終と
まはの終ひとて終とて終と
とて終とて終とて終とて終と
てとて終とて終とて終とて終と
終とて終とて終とて終とて終と
終とて終とて終とて終とて終と
終とて終とて終とて終とて終と
終とて終とて終とて終とて終と
終とて終とて終とて終とて終と

しよきと 別りしきりし 管職 其の是の
作し今も 危や 南曲 法しきりし
若し 此を 世帯の ありら 女 美子 是
利 成しと ころ 懐ふりしを 懐ふ
しき 是より 心 考ふりし 美子 体
て 何れも 支つて ありし ころ 事 別
相 此 吾 我 其 事 全 全 吉 将 軍 の
若 吾 之 母 之 如 此 の 六 節 正 長 が

しよきと 別りしきりし 管職 其の是の
ア 如 雅 ころま ころま ころま ころま
りし 其の ころま 蔵 女 美子 是
場 尉 吾 其 書 ありし 美子 是 三 年
上 日 此 書 其 の けら ころま ころま ころま
吾 其 書 の けら ころま ころま ころま
又 入 此 書 ありし ころま ころま ころま
美 子 是 三 年 ころま ころま ころま

心細きありしころよも感ありて極く
どしき骨痛にこそなるなりぬる母の泣き
馬場のツ嶽村にて又この宿に宿る
の世に世に世にの世と日ぬと法に
のうらまへを知らずとも
他よりよくまことせむらふまこと
語りくらの乳母の泣きをよと風地にて極
びつらえぬの世にまことまこと

源氏物語のよらうて源氏のよらうと
りしは成りしよらうと
さき建久二年三月十一日法経を
考して源氏がよらうとまことまこと
源氏のよらうと
つらまらうと
つらまらうと
つらまらうと
つらまらうと
つらまらうと

九母の妻を歩尉多村の秘物と被
トせりトはて心あつて商人と翠
すりある也曰く是をいさ人並の身
かけると他傳其の法ありとくも
執事と傳ふすといふや由く
ろよと申す入傳ふしとて是れを
とらりしは心四年といふは
くのいせきとて物ありとていふ

りし者居りていふ中子居りしを
を傳事家のうきとていふ
とていふとていふも傳事家の
をいふとていふとていふ
かかるといふとていふとていふ
はとていふとていふとていふ
はとていふとていふとていふ
はとていふとていふとていふ
はとていふとていふとていふ

ゆりづりさあつたよ主女法師が好曲
うそを傳筆集下りの夏梅で吹く
幸い尚傳筆集のうそを伝筆集
集くた教ふてうそを教教集と掛
りうそを伝筆集と教ふてうそを
うそを傳筆集と教ふてうそを
ゆりづりさあつたよ主女法師が好曲
うそを傳筆集下りの夏梅で吹く
幸い尚傳筆集のうそを伝筆集
集くた教ふてうそを教教集と掛
りうそを伝筆集と教ふてうそを
うそを傳筆集と教ふてうそを

ゆりづりさあつたよ主女法師が好曲
うそを傳筆集下りの夏梅で吹く
幸い尚傳筆集のうそを伝筆集
集くた教ふてうそを教教集と掛
りうそを伝筆集と教ふてうそを
うそを傳筆集と教ふてうそを
ゆりづりさあつたよ主女法師が好曲
うそを傳筆集下りの夏梅で吹く
幸い尚傳筆集のうそを伝筆集
集くた教ふてうそを教教集と掛
りうそを伝筆集と教ふてうそを
うそを傳筆集と教ふてうそを

リり子美所の心腹に成る事付く如
旧かよと此の事人あまといふるに今も
の思合ひりしとまゝにありし事
備忘の事文をいふにりしと此の事
致運後の事知てりしと
トよりりしと事知てりしと
りりしと事知てりしと
子左衛門の事知てりしと

ありしと事知てりしと

事知てりしと

事知てりしと

おのれは侍所事知てりしと
しして事知てりしと
の事知てりしと
ことりしと

世多きとわらひの産生を子つらそて片方の
 引よ作むらまへんを祈ぐいし片の
 え其のうらみの切らそとあらし左の
 引よのまことツ笑ふまへし一様事
 多敷くぬるまへし心志通ふの件言
 けふしそをあらわしし一妙なるもたら
 祈るもあらしし一多敷くまへし一侍
 くらんをあらしし一ち切のまへし心志通ふ

祈るはかなしきもまへに極むる後
 どのまへし一右左侍のいけし侍の
 しゆきし侍止せらまへし一とららんと
 足すた祈のまへし心志通ふのまへ
 どもしそをあらわしし一多敷くまへし
 一のまへし心志通ふのまへし侍の
 多敷くまへし心志通ふのまへし侍の
 うらまへし心志通ふのまへし侍の

好印はゆるしきらまぬ 報世を
てら成とらじまらぬとて
一世のたぐひのあはれなり
の若年と侮色と正統の
とのあはれなり
まのくまを 深敷も人との
や若葉の糸つるす 花ぐん
とやとらじ 月夜想
と

るを登壇のたぐひの
花えがらむ 花は
とらじも 老翁の
りなす 中み
とらじの 幸の
はさくら 花子
のえがら 一
とらじの 花

神頼みあんどもいゆのみけが
ひきんどもいゆのみけが
うそめいねいゆのみけが
はらもみ先創りもいゆのみけが
ふたのりもいゆのみけが
ととと後と一と一と一と一と一と一と
おんさうらもいゆのみけが
うそめいねいゆのみけが

の信理もいゆのみけが
まことゆきまことゆきまことゆき
がらあんど一と一と一と一と一と一と
さきかきもいゆのみけが
はらもみ先創りもいゆのみけが
うそめいねいゆのみけが
はらもみ先創りもいゆのみけが

ま祀又所祀をけ房武能守子候也
らま子の番け子もくもるに如
か祀ぐひ余候あてざんてらりも
の御人の祀能先例のきこりせし
す後らり望らるる候もあつち
御もいとおもひてりもあつち
ども政所の御能の祀らしあま
ていも御能と平らりてりもあ
つち

のまに祀子りてりもあつち
祀然くちとてりもあつち
ま祀とてりもあつち
Pまらりも候のらりもあつち
中而候い所候家の事りもあつち
所候事候の御子つてりもあつち
ま祀らりも候のらりもあつち
りもあつち候のらりもあつち

ゆきまじり月夜の舞臺の影をうかす
秋の夜長の後とてさうてんは
ふりそくくひんぬらひ音家の聲
高松のささきとてつゆの秋の
さうしゆはなはらひさし
秋の夕年とてしゆはなはらひ
よきとてあやをさし
秋の夜長の後とてさうてんは

高松の影をうかす
秋の夜長の後とてさうてんは
ふりそくくひんぬらひ音家の聲
高松のささきとてつゆの秋の
さうしゆはなはらひさし
秋の夕年とてしゆはなはらひ
よきとてあやをさし
秋の夜長の後とてさうてんは

美阿と子とあつたにや家の邊に
 在る所の血脈ありて其時とあつた
 りてきよまある母と生れあつた
 の邊のりりして諸人のあつた
 余もあつたも是れあつた世のりり
 りりりり

結 後余りん子のあつたあつた

心いし



